

## 伊勢湾台風災害誌

毎年、9月26日が近づくと『伊勢湾台風災害誌』名古屋市、1961年3月を手にとる。名古屋市大滝子キャンパス近くの古本屋で買い、いまでも大切に書棚に並んでいる。私は小学生だったが、生涯忘れられない超大型の台風だからだ。記憶を呼び起こすために、すこし紹介したい。

昭和34年9月21日マリアナの東にあった弱い熱帯性低気圧は急速に発達して、22日9時には台風15号となり、同日15時にはサイパンの北東150kmの海上で970mbの中心気圧を示した。

その後さらに発達して、中心気圧は894mbと深まり、最大風速75m/sの超大型の台風となった。台風は速度を増し、26

日14時ごろには紀伊水道の南およそ200kmの海上に迫り、18時過ぎに潮岬西およそ15kmのところを中心に上陸した。潮岬では18時13分最低気圧929.5mbを観測し、台風の目に入った。台風15号は、伊勢湾沿岸地方にあっては最悪のコースを通った。最大風速は名古屋で22時に南南東37m/sを観測し、21時半ごろ名古屋港で最高潮位5.81mを示した。

写真は最高浸水水位図である。名古屋市の西部、とりわけ南部は2~3m、ところによっては5mに達する地域も見られる。道徳など南区の浸水は激しいものがあった。今回の台風によって、本市は古今みぞうの被害をこうむった。なかでも激じん地指定を受けた南部5区(南・港・中川・熱田・瑞穂)の被害は大きかった。犠牲者が最も多く出たのは南区の1417人で、これは全体の76.6%にあたる。次に多かったのは港区で375人(20.3%)、2区で大半を占める。愛知県全体の死者の6割強が本市であった。

伊勢湾台風が襲来したとき、名古屋市千種区の鉄道官舎2階に住んでいた。26日は土曜日なので、昼過ぎには小学校から自宅に帰った。すでに強い風が吹いていたと思う。大きな台風が来るというので、母は落ち着かない様子だった。夕方には暴風雨が吹き荒れ、夕飯を早く済ませて台風に備えた。その後は何時間か木製の雨戸を押さえていた。雨戸が壊れ、窓ガラスが割れないよう必死であった。千種区は浸水被害はほとんどなかったが、南区などで大変な被害が出ていることを、あとで知った。退職近くになって、甚大な被害に見舞われた南区の道徳や白水地区などを訪ね、レポートを書き寄ってきた。

(2022年9月26日)

